

## 地域における公益的な取組のご紹介

### ～地域に開かれた「実家」のような居場所「柿の実ひろば」～

#### ◇事業概要◇

施設名：社会福祉法人前田福祉会 柿の実保育園

場所：浦添市前田 1-11-17 柿の実保育園 2 階

開所日時：毎週火曜・木曜（※祝祭日除く）朝 9：30～12：00

駐車場：保育園駐車場

設備等：ひろば専任職員が 1 名常駐・ひろば専用ルーム・はいはいスペース  
・授乳用プライバシースペース確保可・調乳設備有（粉ミルク持参）



～きっかけは、50 年前の気づき。「地域に開かれた保育園」を目指して～

1970 年、石川君子園長（現：石川君子理事長）が私立保育園連盟の全国大会に出席した際、東京都の保育園を見学する機会がありました。そこでは、保育園には通っていない地域の親子が自由に出入りしており、専任の職員が親子に寄り添う姿が強く印象に残ったとの事でした。

実は、当時の沖縄では、保育園は「子どもを預かってお世話をする場所」という認識が一般的でした。

しかし、東京での取り組みに強い感銘を受け、「保育園は地域に開かれていなければならない」と確信したことが、すべての始まりでした。

～沖縄復帰後、子育て支援のはじまり～

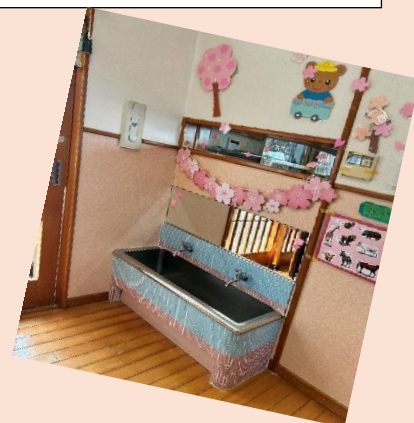
沖縄が日本へ復帰した 1972 年以降、園の周辺には公務員宿舎が建ち並び、県外から赴任してきた公務員のご家族が多く暮らしていました。

そのため、近くに頼れる親族がない母親も多く、子育ての不安や悩みを抱えやすい状況にありました。

当時の園舎は、まだコンクリート造りではない平屋建てで、その園舎の片隅にあった **3 畳半ほどの小さなスペース**を使い、地域の親子がいつでも気軽に立ち寄れる場所をつくったのが、現在の子育て支援の原点です。

専任の担当職員がいない時代でしたが、石川園長が自ら母親たちの声に耳を傾け、寄り添い続けました。そのうちに、悩みを抱えた母親たちが自然と集まるようになり、3 畳半の空間は『実家のように安心できる場所』になっていきました。

「どうやって離乳食を食べさせたらいいのかわからない」、「子どもの遊ばせ方がわからない」そんな不安を抱えた母親たちが、わが子を遊ばせながら相談しあい、母親同士で会話を交わしたりする姿が日常となり、この 3 畳半のスペースは、母親たちがほっと息をつける大切な居場所となっていきました。



## ～1995年、本格的な子育て支援事業としてスタート～

3畳半の小さなスペースから始まった取り組みは、地域の母親たちの強いニーズに支えられ、1995年ごろから本格的な園独自の子育て支援事業として「柿の実広場」が形づくられていきました。

当時はまだ制度も整っておらず、すべてが手探りの状態でしたが、「地域の親子を支えたい」という想いを原動力に、園内の一室を開放し、親子が安心して過ごせる環境づくりを続けていきました。

## ～2008年浦添市の補助事業による飛躍と「柿の実ひろば」の確立～

2008年2月4日浦添市子育て支援事業として委託を受け、地域子育て支援センター「柿の実ひろば」を開設しました。

午前・午後の二部制で開所し、年間1万人を超える親子が利用するほど、活動は大きく広がっていきました。講師を招いての食育講座や親子クッキングまた、運動会参加、プール遊び、バザー開催など、多彩なプログラムを企画・実施しました。

## ～2022年浦添市の補助事業の終了と大きな決断と自主運営までの道のり～

2022年度で長年続いた補助事業が終了し、財源の支援がなくなることになりました。

しかし園では、柿の実ひろばを「やめる」という選択肢はありませんでした。

これまで、「相談できる人がいない」、「子育ての孤独がつらい」、「産後の不安で気持ちが追いつかない」、

「家庭の事情で頼れる人がいない」そんな母親たちの声に寄り添い続けてきたからこそ、

母親が安心して過ごせる場所の必要性を深く理解していたからです。そのため、補助がなくなった後も、

園はこの取り組みを「地域における公益的な取組」と位置づけ、2023年度からは園の自主事業として継続することを選びました。

現在は、週2日開所し、1日平均5～7名の親子が訪れ、給食体験（有料）も提供しています。

また、保育・福祉サービスに関する情報を目に触れやすい場所に掲示する工夫を行い、必要な際には適切な専門機関へ案内できる体制も整えています。

### ♡公益的な取組についてのお話を聞かせてください♡

先生方のお話を伺いながら、私自身も夜寝ない娘を抱えての育児に悩み、子育て支援センターに救われた当時のことを思い出し、胸が熱くなりました。

柿の実ひろばは、母親の悩みに寄り添い、孤独に寄り添い続けてきた場所です。

それはまるで“地域の実家”のようであり、お母さんたちにとって安心して頼れる、時には甘えられる、心の拠り所のような存在だと感じました。

- ・助けを求められる場所があること。
- ・気持ちを受け止めてくれる人がいること。

それだけで、母親は安心し、子育てに向き合う余裕を取り戻すことができます。補助事業が終わり自主事業へと移行した今も、変わらず親に寄り添い続ける前田福祉会の姿勢に触れ、私はあらためて、この場所が地域にとってどれほど大切な存在なのかを実感しました。3畳半から始まった取り組みが、今も変わらず親子の心に寄り添い続けていることに、温かい気持ちでいっぱいになりました。

対応していただきました、石川理事長、武村先生本当にありがとうございました。

施設団体福祉部：新垣



▲育児に関する情報誌